

《研究ノート》

西独大学の「社会学研究所」巡り

—その3—

鈴木 幸 壽

キール大学

Universität Kiel

社会学研究所

Institut für Soziologie

19世紀の中頃、すでにキール大学では社会学的な題目の講義が講ぜられていた。(例えば1846年から1851年まで、ローレンツ・フォン・シュタインによる講義) 19世紀の4半世紀には、1881年テンニエスの教授資格論文が通ったのにもかかわらず、制度化は差し当って延び延びになり、とくに国民経済学の枠内で、社会学的問題定立への大きな関心が教育・研究面で発展したのである。第一次大戦前のある時期、ドイツの大学の到る所で、社会学の講座やゼミナールの創設が議論されていたとき、1909年にテンニエスが員外教授に、そして1913年以来(1916年まで)正教授に任命されたが、両方とも「経済学的国家科学」担当の教授であった。

第一次大戦後、社会学は教育・研究面で急速な発展を遂げたが、そのことはまた、社会学的主题の叙述という点で、国民経済学的・歴史学的そして法学的教育においてもその実を示した。1921年と1924年の間、関心を寄せた大学教師は、社会学の研究サークルにおいて協力した。哲学の博士課程では社会学が主専攻に、国民経済学の博士課程では副専攻に選ばれたし、

その他(例えば法律家・歴史家のばあい)社会学はまた他の研究課程の中で試験テーマになった。テンニエスの後任者ということになるが、この時期の社会学の教授はハンス・フライヤー(1922-1925)とアドルフ・レーベ(1926-1931)であった。同じ時期に社会学科は創設準備に入った。エヴァルト・フォン・ボッセ(1920~ノルウェイの名誉教授として1926年まで)、ケイ・バロン・フォン・ブロッツドルフ(1910-1920私講師, 1921-1945員外教授, 1936-1945ホップズ協会会長)、フリートリッヒ・ゴットル=オットリリエンフェルト(1924-1926, 国民経済学と社会学の正教授) ルドルフ・ヘバーレ(1929-1938社会学講師) ヘルマン・カントロヴィッチ(1929-1933, 刑法・法哲学および法社会学の正教授) その他テンニエスは1920年から1933年まで社会学主任教授として活躍した。第一次大戦後盛んになった世界経済研究所では、広範囲にわたる社会学の文献と資料が蒐集され研究がおこなわれた。(1933年まで、ゲルハルト・コルムなどによって)

第三帝国時代になると、社会学の問題は、一部は民族学・国民経済学・歴史学そして外国学の学問分野にとって代られ、一部は社会学で教授資格をえた大学教師によって社会学研究がおこなわれた。〔ゲルハルト・マッケンロート1934年員外教授, 1940-41社会科学の正教授, ケイ・バロン・フォン・ブロッツドルフとルドル

フ・ヘバーレ（1937年まで）も同じ]

第二次大戦後、キール大学の社会学は専門として強力な制度化がおこなわれた。1948年（1946年以降委任教授に従事、1948年には再び正教授に任命された）マッケンロートが研究グループを作り、1952年には「社会学ゼミナール」（1973年には「社会学研究所」に改められた）ができたのである。大学教師として活躍した人びとは、ゲルハルト・マッケンロート（1948-1955, 正教授）ゲルハルト・ヴルツバッハ（1956-1965, 正教授）カール・マルチン・ホルテ（1957-1961, 私講師）パウル・トラッペ（1966-1969, 正教授）ラルス・クラウゼン（1970年から正教授）ロルフ・ツィーグラ（1973-1975, 正教授）フランツ・ウルバン・パピイ（1978年から正教授）そしてさらに、ハインツ・ザーナー（1982-1983, 私講師）ハンス・ヴェルナー・プラール（1982年以来 私講師）である。現在社会学研究所には二講座と三つの学術評議職 二つの学術共同研究員制度がある。この人事構成で全体で約400人の学生の面倒を見ている。約150人が主専攻（卒業は学士、修士、博士などの称号）約250人はほとんど副専攻（例えば国民経済学士 社会経済学士 農学士 地理学士 社会科の上級高校教職など）。

社会学研究所と二つの講座は経済学部と社会科学学部に張りつけられていて、そこでは社会・経済学士の課程がとれる。哲学学部の社会学は、主専攻としてはマギステル・アルティムの学位にまとめられている。主専攻学生の手世と並んで、とくに多くの副専攻の学生がいろいろな課程から成り立っている。研究では現在とくに次のテーマが際立っている。すなわち、ネットワーク研究、災害社会学、選挙とエリート研究、価値転換、文学社会学、海洋社会学、外国人の職業、社会学史（とくに第三帝国時代のそれ）。1987年以降、経験的婦人研究の研究施設が作られたし、災害社会学の研究施設も作られるはずである。海洋社会学の深化も議論されている。

ドイツ連邦共和国のほとんどの古い大学に比べると、キール大学の社会学は弱体である。

執筆者 ハンス・ヴェルナー・プラール
(Hans-Werner Prael)

SOZIOLOGIE

Mitteilungsblatt der Deutschen Gesellschaft für Soziologie. 1.87. (S. 44-47) より転載翻訳

(すずき ゆきとし, 本学科主任教授)